

## メーリケの拾遺詩 (2)

—『詩集』に収録されなかった45篇の詩と  
それらを公表した新聞・雑誌・年鑑等との関係—

森 孝 明

### 1.

エドゥアルト・メーリケ(1804-1875)が一生の間に書き残した詩の数は、少なくとも460篇以上ある。その作品は大きく二つに分けることができる。詩集に収められた詩とそれ以外のすべての詩、即ち捨遺詩である。詩人が自ら作品を選んで編んだ生前最後の『詩集』第4版(1867年)には、226篇の詩(タイトル数)が収められている。この詩集には、メーリケの創作した作品の最良のものが厳選されて最終的な姿を与えられており、一つの自己完結した詩集を形成している。

この最終版『詩集』に収められなかったすべての詩が捨遺詩作品群として残っているが、それらは更に3つのグループに分類される。メーリケは1838年に『詩集』初版を出版した後、第4版まで3度この詩集の増補改訂版を出し、その都度作品に手を加えたり、不満足な作品を削除したり、また新しくできた詩を追加した。捨遺詩の第一グループは、『詩集』(1~3版)に少なくとも一度は入れられたが、最後の第4版からははずされた詩群である。第2グループは、詩人が個々の新聞や雑誌あるいは年鑑などに印刷公表しながら、『詩集』には一度も収録しなかった作品群である。最後の第3グループには、詩人が全くどこにも印刷公表しなかった詩の数々が入っている。

この論考は、メーリケの捨遺詩を対象とするものであるが、第1グループの作品群については前回扱ったので<sup>(1)</sup>、ここでは第2グループの捨遺詩群につ

いて考察したい。その作品の数は45篇である<sup>(2)</sup>。制作年代は、メーリケが活字にした最も初期の詩「ヴェネツィア」の1821年頃から、『詩集』最終版の出した2年後1869年に作られた詩「切り取られた一本のバラに」に至るまで広がっており、それら45篇の作品が、20以上の新聞・雑誌・年鑑等に、1829年から1873年に渡って発表されている。しかもこれらの新聞・雑誌等には、『詩集』に入れられた作品の約半数近くも初公表されている。従って、捨遺詩45篇とその掲載紙との関係は、メーリケの詩全体に関わる問題としても捉えることができるであろう。更にメーリケと数多くの新聞・雑誌等との関係を探ることによって、時代との交渉が非常に少なかったと見られる詩人の別の姿も見えてくる。1830年のフランス革命直前からビスマルクによるドイツ帝国の誕生直後までの政治と社会と現実の時代の中で、メーリケもまた彼なりにジャーナリズムと関わりを持って、詩人としての活動を行っていたのである。そのような考察の上で、45篇の詩が『詩集』に一度も入れられることがなかった理由も考えていきたい。

## 2.

ドイツ解放戦争後のウィーン会議の頃(1815年)から1848年の三月革命の頃までの間を、20世紀初頭の人々は、戦争のなかった古き良き時代として懐かしくふり返った。このビーダーマイヤー(Biedermeier)と呼ばれる時代は、しかしオーストリーの宰相メッテルニヒを中心とする復古主義の時代であり、1819年のカールスバートの決議による厳しい出版法や「若きドイツ派」の一切の作家活動を封じ込めようとした1835年のドイツ連邦議会の決定が象徴しているように、政治的自由の弾圧を目指して、刑法や警察法を適用しての書籍・印刷物に対するまことに厳しい検閲が行われた時代だった。例えば、メーリケとも後に関係するのだが、コッタ出版社発行の、この時代のドイツで最も重要な政治新聞の位置を占めていた『一般新聞』(Allgemeine Zeitung)は、最初テュービンゲンで1798年に『最新世界情報』(Neueste Weltkunde)という名

前で旗揚げしたが、検閲の規制を逃れるために、その年のうちにもう毎日名前と発行場所とを変えねばならず、チュービンゲンからシュトゥットガルトへ移って『一般新聞』と名を変え、更にヴェルテンベルクからバイエルンへと脱出して、ウルム（1803年）を経てアウグスブルク（1810年）へ移転し、そして最後にはミュンヘン（1882年）に至って世紀を越えたのである<sup>(3)</sup>。

それにもかかわらず、この19世紀は、出版界の多様な展開が著しく増大した時期だった。その大きいきっかけはドイツ人フリードリヒ・ケーニヒが1811年に蒸気式高速印刷機を発明したことで、これによって出版の世界は決定的な進歩をとげ、印刷物の大量生産が飛躍的に促進されたのである。ちなみにドイツにおける新刊書の年間出版点数は、1800年には3000点であったものが、1834年には14000点に増えていたという<sup>(4)</sup>。これに呼応するごとく、解放戦争後の市民大衆層に激しい教養への飢えが広がったとマックス・フォン・ボーン（Max von Boehn）は指摘する。18世紀のドイツには大部分の地域に本屋というものがないに等しく、大多数の人々は文学的欲求なぞ皆目持たず、市民の蔵書といえば、暦、料理の本、祈とう書、計算早見表、場合によっては更に説教集と歌の本が加わるといった程度だった。ところが解放戦争が終わると、まるで数百年にわたる怠慢による遅れを取り戻さなくてはならないかのように、教養に対する文字通りの飢えが人々を襲い、学校に殺到する人々の数は増大し、至る所に新しい教育施設が造られ、これまでは学問や文学に何一つ興味を示さなかった人々、即ち商人や手工業者たち、なかでも女性たちが今や知識を求めて突き進んだ<sup>(5)</sup>。その背景にはもちろん、政治活動を回避した人々の関心がすべて学問や美術、文学へと向かい、政治が彼らに与えることを拒んだ充足感を、そうしたものの中に探し求めたということが考えられる。文学の分野においては、ロマンが現実経験に適した表現形式として愛好され、ノヴェレ、旅行記、文芸記事のような新しいショート形式が広く発達して行き、様々な種類の「目的文学」がめざましい広がりを見せ、増大した読者層の意識に応じた雑誌の創刊が相次ぐ時代になったのである<sup>(6)</sup>。話を詩文学に限ってみるならば、特に19世紀の20年代30年代は、詩作は欠かすことのできない教養の一部であっ

たとペーンは書いている。言葉を駆使するすべを心得ている教養人にして初めて、詩を作るという軽やかな技芸を行うことができるという次第で、老いも若きも、身分の高きも低きも競うように韻を踏み、この時代のドイツほどに詩句が膨大に印刷されたことはかつてどこにもなかったかもしれないというのである。世の中それほど平和になったということなのかもしれない。しかし時の移りは以外に早く、「つい先ほどまではほとんど無限に近い数の年鑑、手帳、文芸雑誌といった印刷物が、山なすへボ詩を続々と市場に出すといったありさまだったが、こうしたことは次第に沙汰やみになっていった」<sup>(7)</sup>。

それはともかく、こうした状況の最中の1826年に、19世紀前半の最も指導的な文芸新聞『教養階級のための朝刊紙』(Morgenblatt für gebildete Stände)の出版社主コッタ (Johann Friedrich Cotta) に向かって、作家のヴィルヘルム・ハウフ (Wilhelm Hauff) が、叙情詩よりも散文の物語を優先すべしという手紙を書き<sup>(8)</sup>、翌年この新聞の編集長の地位に就いたことのほうが、より重要な文学状況を暗示しているかもしれない。なぜなら、その3年後に起こるフランス革命から「若きドイツ派」の台頭にかけて、時代は一気に政治的ジャーナリスティックな傾向を帯び、詩の時代から散文の時代に入ったように見えるからである。そしてまさにそのような時代状況の中で、メーリケは詩人としての活動を開始するのである。

### 3.

13才の時に医者だった父親を亡くしたメーリケは、母方の叔父が牧師をしていたこともあって、将来聖職に就くべく、ウーラハ僧院学校、チュービンゲン大学神学部へと進んだ。そして卒業後の1826年秋から1843年に健康上の理由で恩給退職するまでは、プロテスタントの牧師を生業としたのである。しかし一度だけこの職業に背を向けてジャーナリズムの世界に生きようと真剣に考えたことがあった。

聖職について1年目の1827年春に、彼の守護神ともいうべき姉のルイーゼが

病死し、夏には初恋の相手だった従姉妹のクララ・ノイファーが他の牧師と結婚してしまったこともあって、メーリケは仕事に身が入らなくなった。元々使命感を抱いてこの職に就いたわけでもなく、友人たちが学問やジャーナリズムの世界へ転身するのを目にして、神に仕える仕事に悩み始めたのである。そして休暇を何度も延長してほぼ一年間聖職を離れ、その間に様々の仕事の計画を立て、特に文学雑誌の編集の仕事に憧れて奔走した。1828年3月には<sup>(9)</sup>、コッタ社主ヨーハン・フリードリヒ・コッタに直接就職志望の手紙を書き、『朝刊紙』の初代編集長カール・フォン・グリーンアイゼン (Karl von Grüneisen) へも手紙を送り、更に同郷の大先輩詩人グスタフ・シュヴァープ (Gustav Schwab) にもコッタへの仲介を依頼したが、すべて無駄に終わった。こうしてほぼ一年が経った10月、メーリケはシュトゥットガルトのフランクー社からの話に乗ることになる。社主のフリードリヒ・ゴットロープ・フランクー (Friedrich Gottlob Franckh) が週に4回発行の『婦人新聞。女性のための朝刊紙』 (Damen-Zeitung. Ein Morgenblatt für das schöne Geschlecht) (以下『婦人新聞』と略) と、週刊新聞『文学・芸術・流行のための鏡』 (Der Spiegel für Literatur, Kunst und Mode) 及びその付録の『蝶。鏡へのパンフレット』 (Der Schmetterling. Ein Flugblatt zum Spiegel.) を準備計画していた<sup>(10)</sup>。この新聞に定期的に物語と美学的論文を書いてほしいという依頼に、彼はすぐさま契約を結んだ。ところが一ヶ月もしないうちに彼は新聞のための物語の制作に嫌悪を抱いてしまった。自分はそのような散文作りに相応しくなく (当時は戯曲に向かおうとしていた)、また契約によって束縛されたと感じたのだ。結局彼はその年のうちに契約を解除し、牧師館の屋根裏部屋にしぶしぶ引き返して、以後は牧師と詩人の二足のわらじをはくことになる。要するに、自由で解放された気分の時にのみ詩神の訪れを得ることのできたメーリケのような詩人には、締め切りに追われながら定期的に何かを生み出すことができなかつたのであろう。

そういう次第で、メーリケにとって重要な活躍の舞台となるはずであったこの『婦人新聞』は、詩人とは縁の薄いものとなり、そして彼に関係があるのか

どうか、新聞は二年間（1829-30年）しか続かなかった。しかしながら詩に関しては二編だけこの新聞に掲載されており、その一編が創刊号（1829年1月1日）に載った詩で、捨遺詩の中の4番目の詩「生と死」（4, Leben und Tod, ?）<sup>(11)</sup>である。

### 生と死

生が死を求めるのか  
それとも死が生を求めるのか  
朝焼けと夕焼けが出合って  
手を取り合うことがあるだろうか

恋人たちを哀れんで  
静かな夜が間に入り込み  
合図をしてささやく「アーメン！」—私とあなた！  
こうして彼らは震えながら抱き合う

制作年の不明なこの詩は、初期に多い民謡詩風の4行1連の8行詩で、「生が死を求めるのか／それとも死が生を求めるのか」という内容は、出合うことのない「朝焼け」と「夕焼け」の形象にずれて、入り込む「夜」のなかでの恋人たちの抱擁で終わる。女性の読者層を想定して作られたかどうかはわからないが、観念的作為の見えすぎる味気のない詩である。以後この詩に関する詩人の言及はどこにもない。

## 4.

メーリケが初めて自分の詩を活字にして文壇にデビューしたのは、先の『婦人新聞』から半年あまり前の1828年5月2日のこと、掲載紙は、彼があれほど勤めたかったシュトゥットガルトのコッタ出版社発行の『教養階級のための朝

刊紙』(Morgenblatt für gebildete Stände. [ab 1837, Morgenblatt für gebildete Leser] Jg. 1-59. Tübingen [ab 1820, Stuttgart; ab 1855, Augsburg, München]: J.G.Cotta 1807-1865.) (以下『朝刊紙』と略) 上であつた。彼にとって幸いだつたのは、この年、グスタフ・シュヴァープが「詩部門」の編集長に就いて(1837年まで)、叙情詩が独自の地位を確保し、また新聞としても丁度絶頂期にあつたことであろう。この『朝刊紙』は、戦争の「血なまぐさい時代」1807年に、「ドイツの芸術と文学」のための「新しい歓迎すべき結合点」を建てるべくスタートした。<sup>(12)</sup> 日曜日を除く毎日4頁の日刊紙で(1851年からは24頁の週刊誌に姿を変えた)、「政治抜き」を基本方針に、実際には、叙情詩、散文小説、戯曲のオリジナル作品の他に、文学・美術に関する評論、ポピュラーな学術論文、そして旅行記や様々の都市での文化生活についての通信記事など、政治以外のほぼ全領域を内容とした。1865年まで発行されたという経歴において特に19世紀前半の文学の証人であるばかりでなく、この時代の多くの知識人が決定的な影響力を持つ文学ジャーナルとして認める権威ある新聞であつた。<sup>(13)</sup>

さて、メーリケはこの新聞に1846年までの18年間に合計45篇の詩を載せている。しかもそのほとんどが初期から中期にかけての代表作となつたものであることからして、彼自身この新聞をいかに重視し、かつ自信作を投入していったかが想像される。それは45篇のうち44篇が後に『詩集』に収められたことからわかるのだが、にもかかわらず1篇だけはすされた実に不運な作品がある。捨遺詩「お手上げ」(25, Keine Rettung, 1845)である。この詩は1846年の『朝刊紙』41号(2月17日)に、他の5篇と共に載つた。1845年夏までの作(たぶんそれより数年前)とされており、30年代後半から40年代にかけて多用した古典的なディスティヒオンを一つだけ用いたエピグラムである。

#### お手上げ

芸術よ エロスを逃れて御身の腕の中に!

だが崇高なる御身は懐に密告者を抱いている

エロスと芸術との関係を簡潔に形式化したこの詩は、たぶん実際の愛（この時期メーリケは後に結婚する女性と恋愛中だった）とは関係なく、古典古代のエロティッシュな叙情詩の読書の影響のもとに作られたのであろう。<sup>(14)</sup> なぜこの詩を詩集に入れなかったのかは明らかでない。ともあれこの年を区切りとして、以後メーリケはこの新聞から遠ざかってしまった。

## 5.

フリードリヒ・ゼングレ (Friedrich Sengle) によれば、文学に関する最も大きい出版形態は「詩神年鑑」(Musenalmanach) である。この形態は、シラー編集でコッタ出版のシリーズ (1797-1800年) が頂点であり、ロマン主義者たちはこれには関心を示さず、1820年以後の復活も短命に終わった。1833年にシャミッソーとシュヴァープが編集してライプツィヒ (ヴァイトマン書店) で出した『ドイツ詩神年鑑』(Deutscher Musenalmanach) (1833-36年) に若い詩人たちが殺到したのは例外的で、発行部数はたったの500部止まりだった。そして後期ビーダーマイヤー時代には出版社も詩人も「詩神年鑑」には飽きてしまったという。<sup>(15)</sup> 確かにそうなのかもしれないが、この形態がすっかり消えてしまったわけではなかった。しかもメーリケが直接関わった「ドイツ詩神年鑑」は三種類もある。

ゼングレが例に挙げた上の『詩神年鑑』には、1834年にメーリケの2編の詩が載っている。次いで1841年にベルリンで発行された同名の『ドイツ詩神年鑑』(Deutscher Musenalmanach. Herausgegeben von Theodor Echtermeyer und Arnold Ruge . Berlin : Simion. 1841) には、5篇の詩が載っており、そのうちの2篇、「エマ・ケルナー」(11, Emma Kerner, 1837) と「マダム K に」(15, An Madame K, 1839) が捨遺詩である。メーリケは1839年12月6日に編集者の一人アルノルト・ルーゲから年鑑への寄稿を依頼されたが、このときは作品が期限に間に合わず、翌1840年10月23日に今度はもう一人の編者テオドー



ア・エヒターマイヤーがあらためて依頼し、掲載にいたっている。

「エマ・ケルナー」の詩は、1837年7月に詩人で医者ユスティヌス・ケルナー (Justinus Kerner) が娘のマリーをつれてメーリケを訪問した、その後書かれたものであろう。エマは当時15才くらいだったマリーのことである。この詩は「十字の印を付けた彼女の記念帳のはじめに／ヴァインスベルク1837」という副題が示すとおり、公開を目指した詩というよりは、個人の新しい記念帳に、少女になりすましてちょっとユーモラスに書き留めた詩句という格好で作っており、メーリケのよくやるお得意の手法である。

エマ・ケルナー

幽霊と魔女の前だけでなく－  
悪い友達の偽善の前でも  
すてきな紳士がたのおべっかの前でも  
私は十字を切って身を守ります  
なぜなら私は賢い乙女です故

「マダムKに」の詩も、副題「私の『イリス』送付に添えて」が示すように、メーリケが1839年に出版した物語と戯曲文学集（本の名前が『イリス』）を同年5月16日にテレゼ・クラウスという女性に送った時、この詩も添えられた。この女性はメルゲントハイムの医者フリードリヒ・クラウスの奥さんで、1838年10月に知り合って以来、メーリケは夫妻と何度も会っている。この詩も「エマ・ケルナー」と同様に個人に宛てたメッセージの内容を持つ、挨拶詩とでも言えばよいようなもので、公開を意図してはいなかったであろうと思われる。

ベルリンのこの年鑑は、1841年に出た一巻限りであったが、それから10年後にヴェルツブルクから発行された『ドイツ詩神年鑑』(Deutscher Musenalmanach. Herausgegeben von Christian Schad. Jg. 1-9. 1851-1859. Würzburg : Stahel.) は、9年間も続いている。編集者クリスティアン・シャート (1821-1871) は1846年からヴェルツブルク近郊のキッツィンゲンのラテン

語学校長であったが、同時代の人々にとって詩神年鑑はすでに時代遅れの代物になっていたにもかかわらず、一途な頑固さと辛抱強い持続性で、この伝統を更に延ばしたのである。彼は1847年初めにこの年鑑への有名無名の膨大な寄稿者リストを作っており、メーリケの名前は第3番目に出ている。<sup>(16)</sup>つまりメーリケはシャートにとって初めから特別に重要な作家であり、事実、彼は1847年1月10日に、他の作家達への寄稿依頼の手紙の手本として、メーリケ宛に懇切丁寧な手紙を書いている。これに対してメーリケはシャートには返事を書かず、代わりに友人のオトマル・シェーンフート (Ottmar Schönfhuth) に代役を頼んだらしい。その年の3月6日にシェーンフートがシャートに手紙を書いており、その中で彼は、メーリケの健康状態が良くないこと、シャートの依頼に答えたいが他の用件のために出来ないこと、メーリケの代わりに返事を書くよう頼まれたこと、そして良ければメーリケの代わりに自分の作品を提供したいことを述べている。これを読んだシャートは6月10日に再度メーリケに手紙を書き、「歌の花冠」(Liederblumenkranz) への寄稿をもう一度心からお願いし、「あなたをわれわれの真ん中に見たい」という要望をぜひともかなえてほしいと懇願している。しかしメーリケは1851年の創刊号に間に合うようには作品を出さなかった。シャートは12年以上もの間メーリケの寄稿をあらゆる手を使って執拗に求め続けた感がある。しかし結果としてメーリケがこの年鑑に寄稿したのはわずか3篇の詩と彼の肖像画一枚だけであった。

メーリケは、1854年6月頃に友人のカール・マイヤーを通じてシャートから年鑑への原稿をあらためて依頼され、そして約1年後の1855年7月にやっと3篇の詩を送った。3篇共第6巻(1856年)に載っている。この3篇の詩のうちの2篇、「無垢」(2, Unschuld, 1822)と「おふざけの一句」(7, Eine Vers-Tändelei, 1831)が捨遣詩である。「無垢」の詩は初公表ではないので、ここでは「おふざけの一句」について触れておきたい。

この詩は、1830年にメーリケが自分の持っているリヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799) の本に書き込んだ2行詩句であるが、詩人のオリジナルではなくて、古代ローマの詩人オーヴィット (Ovidius) の書

いた詩『ファオンに寄せるサッフォールの歌』(Sappho an Phaon) の翻訳である。なぜメーリケが翻訳を試み、その詩を25年もたってこの年鑑に出したかという点に関しては、少しややこしいが、メーリケの遊び心が働いており、いきさつが一頁分の前置きに報告してある。即ち、このローマの詩人の詩句をイギリスの詩人ドライデン (John Dryden, 1631-1700) が同数詩行の英語には翻訳できないと言ったところ、二つの英訳が出たが、不十分だった。この話をゲッティンゲン大学教授リヒテンベルクが知って、自ら編集している雑誌『ゲッティンゲン・ポケットカレンダー』(Göttinger Taschenkalender) (1798年版) にからかい半分の論文「ドイツにおけるオーヴィットの翻訳家たちのための小さな課題」を出した。即ち彼がこのドライデンの問題をさる市民に話をしたら、翌日すぐに5編もの英訳を送ってきたが、さっぱりお話にならなかったし、その紙もどこかへいった。そこでリヒテンベルク先生は、良いドイツ語訳はできないものだろうか、この題材を世の詩人諸兄姉の課題にして、「詩神年鑑の編集者たち」に良い作品の発表の場を提供するよう求めた、というのである。この後にドイツ語訳を載せたメーリケ自身の口上書きが続く。「この要求の結果については、提出者(メーリケ)は何も知らされていない。彼自身は25年前にたまたま試訳をリヒテンベルクの著作の中に書き込んだのだが、それを骨董品としてここに提示する。」

要するにメーリケは、リヒテンベルクのふざけた挑戦状を思い出しかつそれを受けて、自分の翻訳を注文通りにこの「詩神年鑑」に載せるというお遊びをやったのだ。しかも50年も前の話に、25年も前の「骨董品」ですがと断って。従ってこの「おふざけの一句」の詩は「詩神年鑑」に載せてこそ意味も味もあるのであって、詩集に入れては面白くないのである。メーリケがこんな手の込んだ遊びをやったのには実は裏がある。編集者のシャートが原稿依頼を自分でしないで、他人を使って詩人に話を持ってきた。彼はこの態度を不快に感じ、「僕は悪いけれど彼(シャート)には断固として何も約束できない。もっともひょいと何かが浮かべば、それでも送ろう」<sup>(17)</sup>と決めたのだ。それで一年も放っておいたのである。この『ドイツ詩神年鑑』とメーリケとの関係は、翌

1857年の第7巻にメーリケの肖像画が一枚掲載されて終わってしまった。シャートはその後も人を介して詩人に寄稿を依頼し、年鑑の最後の巻にも原稿を願ったにもかかわらず、メーリケはついに応じなかった。この年鑑が終了した翌年の1860年に、彼は友人の詩人カール・マイヤー（Karl Mayer, 1786-1870）にこう書いている。「あのシャートは毎年毎年必死にせがんで集めたポケット本を持ち回って、恥知らずのうるさい蠅だ、ヘボ詩人のように悪趣味の編集者だ！」<sup>(18)</sup> メーリケにしてはかなり露骨なけなし方なので、シャートという男がよほど嫌いだったのであろう。

## 6.

1846年まではコッタの『朝刊紙』がメーリケの作品発表の中心舞台であったが、捨遺詩との関係で、彼が関わった40年代までの出版物を簡単に見ておこう。

捨遺詩の16番目にある「グーテンベルクの発明」(16, Gutenbergs Erfindung, ?) という詩は、『印刷術発明400年記念 ドイツ作家アルバム』(Album deutscher Schriftsteller zur 4. Säkularfeier der Buchdruckerkunst. Herausgegeben von K. Haltaus. Leipzig : Festsche Buchhandlung. 1840) に掲載されたものである。メーリケは編者のハルタウスから寄稿を要請され、1840年2月13日にこの詩を送っている。どのくらいの人数の「ドイツ作家」がこの本に寄稿しているかは不明であるが、1832年に長編小説『画家ノルテン』を出版し、1838年には『詩集』初版を出したメーリケが、文壇に詩人作家として認められていたことは間違いのないであろう。作品「グーテンベルクの発明」がいつ作られたかは明らかでないが、その内容から判断して、この本のために書かれたことは十分にありうる。即興的に作られたような軽い詩である。

捨遺詩の18番目の詩「焼け出された男」(18, Der Abgebrannte, 1842) は、『ハンザ・アルバム』(Hansa-Album. Herausgegeben von A. Harnisch. Halberstadt : Lindequist u. Schönrock. 1842) に掲載された。メーリケは、1842年6月15日に友人の詩人J. ケルナーを通して編者のハルニッシュからア

アルバムへの寄稿を依頼され、11日後の6月26日に、この詩をケルナーに送っている。このアルバムは、この年に生じたハンブルク大火災の後、被災者救済の目的で作られ、本の収益は被災者に役立てられた。詩の内容も、まさに火災に遭って財産を何もかも失った一人の男が、大勢の人の励ましと愛に勇気付けられて、人間として立ち上がろうとする姿を歌っている。「おもしろい世界よ、神が勇気づけるととき／人間にどんな力があるか見るが良い」。作品の出来を問題にするよりも、本に参加して傷ついた人々を励ますことに価値があり、遅筆のメーリケが珍しく短期間のうちに詩を書いて送ったのには、慈善的行為になじんでいる牧師としての人間性が現れているように思われる。

『貧しい子供たちのためのクリスマスツリー。ドイツ詩人の贈り物』(Weihnachtsbaum für arme Kinder. Gaben deutscher Dichter, eingesammelt von Friedrich Hofmann. Hildburghausen: Bibliographisches Institut.) (以下『クリスマスツリー』と略)も、一種の慈善的なアンソロジーで、1841年以後毎年一巻ずつ12月に「クリスマスプレゼント」として発行された。内容は、若干の子供のための詩と、大人のためのまじめな詩作品を並べており、本の売り上げ金が貧しい子供たちのために役立てられることになっていた。メーリケとこのアンソロジーとの関係のきっかけは不明であるが、たぶん編者のFr. ホフマンの方から彼に原稿依頼があったのであろう。1845年12月に発行された『クリスマスツリー』4号(1845年)をホフマン自身が送ってきて、その時次号への寄稿を依頼しているからである。この4号には捨遺詩の一編「無垢」(2, Unschuld, 1822)が載っている。次いでメーリケは5編の詩を送り、そのうちの3編が5号(1846年)に載り、その中の子どものための詩2篇「クリスマスプレゼント」(10, Christbescherung, 1836)と「なぞなぞ」(20, Rätsel, 1844)が捨遺詩である。続いて1847年9月のホフマンからの依頼に答えて、この年の6号(1847年)にも3編の詩を掲載したが、そのうちの2編、「パッペンハイムのフェルナンデ伯爵夫人への返事」(17, Erwiderung an Fernande Gräfin von Pappenheim, 1840)と子どものための詩「童謡」(14, Kinderlied, 1839)が捨遺詩に入っている。それからメーリケは16年のブラン

クの後もう一度だけこのアンソロジーに協力している。1864年12月に出された23号に4編の作品が掲載されていて、そのうちの2編「コリンナ」(34, Corinna, 1854)と「ある婦人のアルバムに」(38, In das Album einer Dame, 1858)が捨遺詩である。

結局この『クリスマスツリー』にはメーリケの詩が11篇掲載され、そのうち7篇が捨遺詩として詩集には入れられないままになった。最初の詩「無垢」は1822年詩人17才という最も初期のもので、まだ習作の域を出ていない。「クリスマスプレゼント」の詩は、前書き「12月23日にすでに大きくなったクルミの木が妹クレールヒェンのために庭に植えられ、木にはクリスマスイヴにローソクが飾られて厳かに灯された」の後に、「クルミの木曰く」とあって、詩が始まる。場違いな役を負わされたクルミの木の独白というメーリケお得意のスタイルである。「童謡」の詩は、副題に「アグネスのために」とあるように、親友W. ハルトラウプの娘で当時5才だったアグネスのために作ったたわいのないものである。「パッペンハイムのフェルナンデ伯爵夫人への返事」の詩は、詩人J. ケルナーが主催するサークルの一員で、1838年来メーリケと面識のできたこの伯爵夫人からの招待の誘いに対して、断りの手紙の代わりに書いたものである。「ヴァインスベルクのケルナーの家に送られた」と前書きされた、58行のやや長い詩で、メーリケの中期から後期にかけて多くなる個人性の強い機会詩の一つである。

「なぞなぞ」の詩は、1852年8月に『新絵入り雑誌』(Neue illustrierte Zeitschrift)にも掲載され、更に1853年発行のメーリケの童話『シュトゥットガルトのしわくちやおやじ』(Stuttgarter Hutzelmännlein)の中にも挿入されたのに、詩集には入れられていない。

#### なぞなぞ

わたしはやせた女王  
頭に優雅な冠を載せています  
わたしにせさせと仕える人には

たっぷり褒美をあげましょう

わたしの髪をきれいにすいて  
おとぎ話をいっぱいしながら  
下女たちは髪を一本も残しません  
でもごらんのとおりに禿じゃない

散歩に行くのは思いのまま  
早足の品の良さ  
でもその場からは離れません  
さあみなさん これはいったい何でしょう

「コリンナ」の詩も、1867年に『ドイツ芸術家アルバム』(詳しくは後述)に載り、更に1873年には『ドイツ青年』(詳しくは後述)にも載ったが、しかし詩集には入れられなかった。「ある婦人のアルバムに記す」は、ノイエンシュタットのメーリケの親戚の医者カール・メーリケの妹で、オーバーメンスハイム城に住むエリーザベト・フォン・バッツのアルバムに書かれた詩で、そこには「シュトゥットガルト、58年12月3日、E. M.」と記されている。従って元々『クリスマスツリー』のために書かれたのではなく、メーリケ自身の遠縁の女性のアルバムに書かれた個人的機会詩の一つである。

以上のごとく、このアンソロジーには11篇の詩が載っているにもかかわらず、詩人が詩集に入れたのはたったの3篇であった。詩集には最上の作品を載せることを目指していたメーリケは、ハイデブラントも言うように<sup>(19)</sup>、このアンソロジーを作品の真価を問う真剣な発表の場とは考えていなかったように思われる。掲載作品の多さは、むしろ貧しい子どもたちのための慈善事業へ協力しようとする詩人の積極的な姿勢の現れと見ることができようし、作品の選択も、新しくできたものをというよりは、読者層への意識的な配慮を示している。

## 7.

「19世紀に入って広くドイツの一般大衆の間に普及したものに、広い意味での雑誌があった。(……)一般にドイツの雑誌文化が飛躍的な発展を示したのは、1848/49年の革命以後のことであった。」「1850年以降になると、鉄道などの交通手段が発達し、出版物の輸送が楽になり、また法的な規制が以前に比べ緩む中で、数多くのポピュラーな教養娯楽雑誌がどっと市場に出回るようになった。それらの中の多くは、一般市民の家庭向けの非政治的内容のものであった。」「これら家庭向けの教養娯楽雑誌は毎週発行され、原則として男女の別なくあらゆる階層の人々に向けられていた。そこにはあらゆる科学分野の新しい話題、連載小説、なぞなぞ、読者の便り、イラスト、写真などが盛り込まれていた。」<sup>(20)</sup>

こうした状況の中で、メーリケも新しく登場する雑誌類と様々の形で関係していく。

1851年にマルガレーテ・シュベートと結婚した彼は、経済的な安定を求めて、7年あまりの静かな恩給生活を止め、都会であるシュトゥットガルトへ転居し、カタリーナ女学院での文学の教授に就き、新たな社会的生活に入った。翌1852年に創刊された月刊雑誌『都市と農村のための芸術・娯楽誌』(Kunst- und Unterhaltungsblatt für Stadt und land. Herausgeber : C. Kneller [ab 1853, Sigmund Sax] Jg. 1-3. Stuttgart : C. Kneller [ab 1853, Literarisch-artistische Anstalt (Sigmund Sax)] 1852-1854)<sup>(21)</sup>のために、メーリケは4月26日に7編の詩を送り、それ以後にも数編の詩を送っている。それらのうち6月号に2編、7月号に1編、9月号に1編、10月号に1編そして12月号に2編の計7編が掲載された。この雑誌と詩人の関係は不明である。一年間にこれだけの数を寄稿した裏には、掲載料を得ることで経済生活を少しでも楽にしようという思いもあったであろうが、7篇のうち4編が詩集に入れられており、中にこの年に完成したばかりのメーリケの中期の代表作の一つ「老いた風見鶏」



(Der alte Turmhahn, 1852) や「新しい愛」(Neue Liebe, 1846) が含まれていることから判断して、詩人がこの雑誌に真面目に対応していることは明らかであろう。 捨遺詩として残された3篇の詩はいずれも初期の詩に手を加えたものである。6月号に出た「言い訳」(3, Entschuldigung, 1828) の詩は、「グスタフ・シュヴァープに。彼の『詩集』初版(1828)の印刷されたばかりのゲラ刷りを数時間私の家に持って帰ってもいいという好意を示してくれたのに、その返却が翌朝まで遅れてしまった」(前書き) 弁解を綴ったものである。クルムマッハーによれば、メーリケは1828年当時の極短い稿を、普遍性を持たせる方向に大幅に書き換えかつ書き加えて、1850年にシュヴァープが死んだ後、ここに公表した。しかしその後詩集への採用については、「このファンタジーは大抵の読者には全く奇妙に思われるだろうから、私の詩集にはむしろ入れないままの方がいいと思う」という彼自身の判断で、これを取りやめた。<sup>(22)</sup>

「死んだ恋人」(32, Lieb' in den Tod, ?) の詩は、1828年に出来ていた詩の一部分から作り変えられたもので、「シュヴァーベン方言」と副題を付けてここに公表された後にメーリケの童話『シュトゥットガルトのしわくちやおやじ』(1853) の中にも挿入されている。4行一連で6連からなる民謡詩スタイルである。

死んだ恋人

聖堂横の墓地に

青いにわたこの木が花開き

夜明け前に

白い小鳩が飛び立っていく

小径をいくつも

かすめ飛び

あたしの窓に忍び込み

あたしのもとへやってくる

それはあたしの恋人だった  
白い亜麻の上着も  
銀の指輪も  
あたしのあげたもの

小鳩は会釈して  
ベットにとまって  
あたしの顔をまじまじ見つめる  
でもあたしには触れない

復活祭の三週間前  
ふくろうが鳴く頃  
結婚式を挙げようと  
恋人あたしに言ったのに

結婚式はひっそりと  
ダンスもしないの  
誰が教会に連れてってくれる？  
誰があたしの冠編んでくれる？

3番目の詩「違い」(33, Unterschied, ?)も成立時期不明だが、ディステイ  
ヒョン一つの2行詩なので、30年代半ば以降の作と思われるが、「お手上げ」  
の詩と同様に、メーリケはこうした2行詩にはなかなか満足しなかったとみえ  
る。

違い

ワインのように元気付けてくれる 薔薇の香りは古典的

ヘリオトロープとジャスミンは気高く しかしいつも現代的

(この稿続く)

注

- (1) 拙稿「メーリケの拾遺詩 (1)」愛媛大学法文学部論集第31号1996.1～23頁参照!
- (2) 現在最も新しいメーリケ全詩集と思われる版, Eduard Mörike: Sämtliche Gedichte. Hrsg. v. Heinz Schlaffer. (Goldmann Klassiker 7624) 1984. S.251～288による。なお本文中のテキストもこれに基づく。
- (3) Zeller, Bernhard (Hrsg.): Cotta und das 19. Jahrhundert. Aus der literarischen Arbeit eines Verlages. (Marbacher Kataloge Nr.35) Deutsche Schillergesellschaft Marbach 1980 S.42.
- (4) 戸叶勝也: ドイツ出版の社会史。三修社 1992. 161及び168頁。
- (5) マックス・フォン・ベーン(飯塚信雄他訳): ビーダーマイヤー時代 三修社 1993. 336-7頁。
- (6) Martini, Fritz: Deutsche Literaturgeschichte. Kröner Verlag 1968. S.357.
- (7) ベーン, 前掲書。351, 382頁。
- (8) Sengle, Friedrich: Biedermeierzeit. Bd. 2. Stuttgart 1972. S.7.
- (9) Simon, Hans-Ulrich: Mörike Chronik. Stuttgart, Metzler. 1981. S.53.  
以下細かい日付の記載についてはこの本による。
- (10) Krummacher, Hans-H.: Ein unbekannter Beitrag Mörikes zur Damen-Zeitung. In: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft. 19.(1975) S. 32.
- (11) 原題の前の数字は H. シュラフナーによる詩の配列順を, うしろには詩の成立年を記す。
- (12) Estermann, Alfred: Die deutschen Literatur-Zeitschriften 1815-1850. Bibliographien • Programme • Autoren. 2. verbesserte und erweiterte

Auflage 10 Bde. 1991. Bd.1. S.358-408.

- (13) Vgl. Simon, Hans-Ulrich : Titelgedichte des Cottasche Morgenblattes für gebildete Stände. Stuttgart. 1987. S.1005.
- (14) Heydebrand, Renate von: Eduard Mörikes Gedichtwerk. Stuttgart 1972. S.177.
- (15) Sengle : a.a.O. S.43f.
- (16) Vgl. Krummacher, Hans-H.: Eduard Mörike und Christian Schads >Deutscher Musenalmanach<. In:Geschichtlichkeit und Aktualität. Festschrift für Hans-Joachim Mähl zum 65. Geburtstag/ hrsg. v. Klaus-Detlef Müller... Tübingen. 1988. S.259-335.
- (17) Brief an Karl Mayer, 20. 6. 1854.
- (18) Brief an Karl Mayer, 20. 2. 1860.
- (19) Heydebrand : a.a.O. S.342
- (20) 戸叶勝也, 前掲書。186-8頁。
- (21) Estermann, Alfred: Die deutschen Literatur-Zeitschriften 1850-1880. 5 Bde. 1988. Bd. 2. S.372-3.
- (22) Krummacher, Hans-H.: Mitteilungen zur Chronologie und Textgeschichte von Mörikes Gedichten. In: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft Bd. 7 (1962) Stuttgart. S.304.